京都大学人文科学研究所共同研究 最終報告書

１．研究課題

歴史的メディア認識論：テレビ史におけるメディア論とテクノサイエンスの交錯

Historical Media Epistemology: The Technoscientific Formation of Television

２．研究代表者氏名

ショーン・ハンスン

HSIUNG, Hansun

３．研究期間

2023 年 4 月-2024 年 3 月

４．研究目的

本研究班の最大の目的は「歴史的メディア認識論」とでも呼ぶべき新たな学際的研究領域の輪郭を描き出すことである。特に本研究班が目指しているのは、バシュラール以来科学史研究の基礎となっている歴史的認識論を、キットラー以来のドイツ系メディア論と接続することであり、この連携を通してメディア・テクノロジーがいかに知識の保存、表象、運搬の可能性の条件をかたちづくってきたのかを明らかにすることである。この可能性を探究するため、本研究班はまずテレビを取り上げる。テレビは通常「マス」を対象とするメディアとして、カルチュラル・スタディーズや社会学といった分野で研究されてきたが、本研究班はこれとは対照的に、テレビを人間／ポスト人間の知覚・感覚の新たなモードを作り上げるテクノサイエンスという観点から検討する。この歴史において重要な役割を果たした視聴科学」という分野は、60 年代以降、生理学・心理学・神経科学・工学にまたがる学際的研究グループを組織し、人間と動物の知覚システムについての基礎科学的研究を行っていた。このような観点からテレビの検討を進めることで、本研究班はメディア論が科学史にとってもつ重要性と、テクノサイエンスがメディアにとってもつ重要性、すなわち歴史的メディア認識論の重要性を示す。

This research group seeks to outline an emerging interdisciplinary field which we call “historical media epistemology.” Specifically, we aim to form a rapport between historical epistemology in the history of science and new media studies since Kittler, using this to build theoretical models and practical tools for understanding how media technologies structure the storage, representation, and transmission of knowledge. In order to do so, the group focuses on on television. As a “mass” medium, television has been studied from the standpoint of cultural studies and sociology. In contrast, our goal is to examine television as a site for the technoscientific construction of new modes of human and posthuman sensory perception.

Key to this is the history of the field of "Auditory and VIsual Information Processing" and its research on the perceptual systems of humans and animals through a mixture of physiology, psychology, neuroscience, and engineering. By understanding television as a technoscience of perception, our group demonstrates the deep interconnection between media studies and the history of science.

５．研究成果の概要

オンライン読書会を通して、メディア論研究者と、科学技術史研究者との間にゆるやかな交流をつくり出すことができた。6 月に開催した国際ワークショップでは、メディア史と科学技術史をはじめとした学際的な参加者に恵まれ、放送史や、映像史に還元できない、〈テレビジョン〉史の可能性を示せた。これを踏まえて開催された 12 月のワークショップでは、NHK アーカイブス、NHK 放送文化研究所、国立科学博物館の関係者をお招きし、上で示した歴史観を実際の歴史記述において実現するための史料収集・整理レベルでの意見交換などが行えた。NHK アーカイブスからは特に班長のショーン氏が招待され、特別に意見を求められるなど、単なる交流以上の成果がえられた。また、出版上の成果としては班長のショーン氏によるテレビに関する論文が『Asiascape: Digital Asia』誌に掲載予定である。

６．共同研究会に関連した主な公表実績

なし

７．研究成果公表計画および今後の展開等

出版社などはまだ未定であるものの、6 月に行った国際ワークショップの結果および読書会での議論を踏まえて、テレビについての論文集出版を計画している。